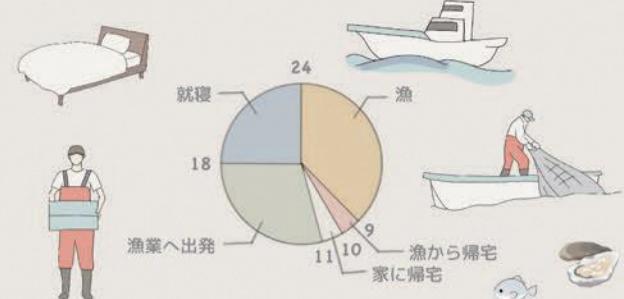


漁について

吉原地区には昔から漁師の町として栄えてきました。最盛期には500人の漁師さんがいました。季節によって獲れる魚が違うため、漁師さんは2~3通りに船を使い分けている、なまこを獲るために大きな船や遊漁船、また、サザエを獲るために潜り用の船などを季節によって使い分けています。

漁師さんの1日



地区中心を通る入江沿いの風景はイタリアの名所になぞらえ、別名「東洋のヴェネツィア」とも呼ばれています。春には桜、冬には雪景色を楽しむことができます。四季折々の景色を堪能することができます。さらに入江には様々な舟屋が並んでいます。昔は漁で木造船を使用していましたが、船を乾いたり台風から守るために舟屋と生活のための町屋が一体になった建築物が並んで建っていました。入江と平行にして並ぶ通りは人々が日常的に使うメインストリートです。このような大通りと入江を繋ぐように多くの細い路地が横切っています。この路地は普通の人はほとんど通りず、船までの行き来や、獲った魚の運搬など、主に漁師さん達が使う道でした。

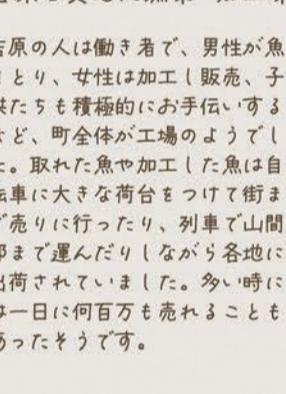
日の出湯

明治の終わりごろに町営の公衆浴場として開業し、1909年に火災により一時休業となりましたが、1920年に営業再開しました。吉原の名湯にお風呂が普及する以前は、仕事終わりの漁師たちが汗を流し、情報交換をする場でした。2階は座敷になっており、吉原のコミュニティの場として、集会などに用いられています。

昔の暮らし

昔の吉原地区

漁業や加工業によって昭和初期から中期にかけて吉原は大きく栄えました。町にはお好み焼き屋など、飲食店などのお店が並び、今まで20軒ほどありました。

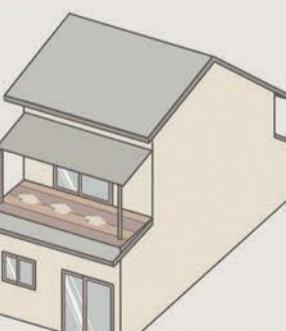


敷地割

吉原に建つ並ぶ東西の奥行きは、南に行くにつれて短くなっているため、デコボコとした敷地割になっています。現在の東西の奥行きは、道幅の整備と吉原入江の護岸の整備により、敷地のずれはほぼ改善されています。また、間口が4m前後の家が連なっており、この景色は吉原の大きな特徴の一つといえます。

干物の屋根

入江沿いは日当たりが良く、そこに位置する町屋の屋根上を魚の加工場として使用し、干し魚などをつくり、町で販売していました。そのため、屋根勾配は緩やかになっています。



大坂建・非大坂建

2階壁面が1階壁面より半間(90cm)ほど後退している建築様式を「非大坂建」、1階壁面と2階壁面の位置が並っている建築様式を「大坂建」といいます。「大坂建」の方が新しく建てられたとされています。

和釘

和釘は、日本の伝統的な家屋建築で使われる釘のことです。通常の釘とは違い、細長い形状で木材に優しく、丈夫に取り付けることができます。和室や床の間棟など、伝統的な建築に欠かせない素材で、美しい日本建築の一部を支えています。

漁師町吉原地区を歩こう Let's walk around Yoshiwara!!

(作成) 京都女子大学デザイン専攻
生活造形学科・鶴岡研究室 / 芝原研究室

吉原地区の概要

1727年の田辺城下の火災によって現在の場所に移転してきた吉原地区は、移転前から漁師が住む町として栄えていました。漁師たちは吉原入江から港へと向かい、漁が終わると入江に面した舟屋に帰ってきます。舟屋の数は少なくなったものの、今も漁師が暮らしている吉原の入江には、多くの船が停まっています。町と小路が交わるその景色は、イタリアにある水の都・ヴェネツィアになぞらえ「東洋のヴェネツィア」とも呼ばれます。入江の景色だけではなく、細長い家が並んで細長い路地をつくっている景色も吉原地区独自の建築景観です。間口が狭くて奥に長いこの家は、舟屋の名残を感じさせます。また吉原地区では太刀振や万灯籠などのお祭りも盛んで、地域と人、人と人が開かわり合う魅力あふれる町です。人々の暮らしを感じながら、吉原地区を歩いてみましょう！

水無月神社

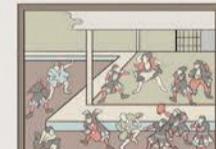
地区が移動してきた当時(1727年)、この地域では低湿地が原因で悪病が流行ってしまいました。人々は危険のために水無月神社を建て、そのおかげで病人はたちまち良くなったと言われています。

また、1712年に鳥居を建てた際は賤が大漁となったりとうです。

現在も日頃から子供たちが集まって遊び、太刀振や年市でのお祭りには多くの人が集まる場所として、吉原の人に深く愛されている神社です。



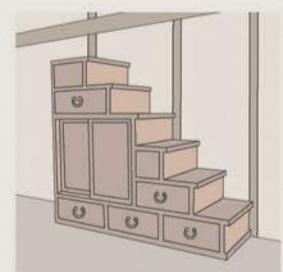
本殿の中には赤穂浪士の討入りや歌舞伎・淨瑠璃などの有名な場面を描いた21枚の絵馬があります。これらは絵馬は江戸時代から明治時代にかけて奉納された歴史的価値の高いものであり、2023年には、貴重品に指定文化財になりました。



水無月神社のしめ縄は漁師達が豊漁を願って作っていましました。太刀振で使われる衣装の腰にも漁師たちが作ったしめ縄が見られます。



吉原地区の建物紹介

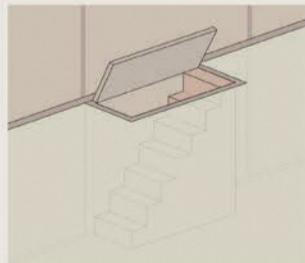


箱階段

木製の箱を重ねたような形態の階段で、近世の町屋などで多くみられます。町屋は狭く収納スペースが充分に確保できないため、階段側面に引き出しを付け、物入れとして利用していました。

パッタリ

1階部分は外部の人が自由に出入りすることができたため、箱階段上に蓋(パッタリ)を付け、貴重品は2階において、防犯対策を行いました。



大引天井

大引天井とは、2階の床板を「サヤラ」と呼ばれる小梁で支え、天井裏を作らず構造材をあき出していた、古民家でよくみられる天井のデザインです。

金掛け

玄関間の壁取り付けられています。扉が閉じてしまわないように、柄竹を下にした状態で収納します。



木鼻

腕木とは、入口の壁から垂直に突き出し、1階の庇(ひさし)を支える為の部材です。腕木の先端は「木の先端=木端(きばな)」と名付けられ、そこから「木鼻(きばな)」と書きます。この先端が「水雲」という渦巻き状の模様でくりぬかれているのですが、水雲の形はシンプルなものから細かい彫刻が入ったものなど、各駄で違うのが特徴です。

五老岳

吉原地区には昔から漁師の町として栄えてきました。最盛期には500人の漁師さんがいました。季節によって獲れる魚が違うため、漁師さんは2~3通りに船を使い分けている、なまこを獲るために大きな船や遊漁船、また、サザエを獲るために潜り用の船などを季節によって使い分けています。

漁師さんの1日

日の出湯

明治の終わりごろに町営の公衆浴場として開業し、1909年に火災により一時休業となりましたが、1920年に営業再開しました。吉原の名湯にお風呂が普及する以前は、仕事終わりの漁師たちが汗を流し、情報交換をする場でした。2階は座敷になっており、吉原のコミュニティの場として、集会などに用いられています。

昔の暮らし

昔の吉原地区

漁業や加工業によって昭和初期から中期にかけて吉原は大きく栄えました。町にはお好み焼き屋など、飲食店などのお店が並び、今まで20軒ほどありました。

吉原を支えた漁業・加工業

吉原の人は働き者で、男性が魚をとり、女性は加工・販売、子供たちはも積極的に手伝うなど、町全体が工場のようでした。取れた魚や加工した魚は自動車に大きな荷台をつけて街まで売りに行ったり、列車で山間部まで運んだりしながら各地に出荷していました。多い時には一日で何百万も売れることがありました。

昔のまつりの様子

吉原では様々な祭りが行われ、町内の人々が親しまれる水無月神社では、相撲大会を開催されていました。地区内の人々の团结力が強く、川沿いに位置する天龍稲荷神社のおみこしは多くの町民が参加していました。

8月の13日~15日の3日間行われる地蔵盆では、子供たちが主体となって遊びていました。海で泳いだり、マラソン大会や軽競争など、吉原の自然を活かして遊びます。小さな子から大きな子まで三日間遊び続いたそうです。

敷地割

吉原に建つ並ぶ東西の奥行きは、南に行くにつれて短くなっているため、デコボコとした敷地割になっています。現在の東西の奥行きは、道幅の整備と吉原入江の護岸の整備により、敷地のずれはほぼ改善されています。また、間口が4m前後の家が連なっており、この景色は吉原の大きな特徴の一つといえます。

和釘

吉原に建つ並ぶ東西の奥行きは、南に行くにつれて短くなっているため、デコボコとした敷地割になっています。現在の東西の奥行きは、道幅の整備と吉原入江の護岸の整備により、敷地のずれはほぼ改善されています。また、間口が4m前後の家が連なっており、この景色は吉原の大きな特徴の一つといえます。

干物の屋根

入江沿いは日当たりが良く、そこに位置する町屋の屋根上を魚の加工場として使用し、干し魚などをつくり、町で販売していました。そのため、屋根勾配は緩やかになっています。

大坂建・非大坂建

2階壁面が1階壁面より半間(90cm)ほど後退している建築様式を「非大坂建」、1階壁面と2階壁面の位置が並んでいる建築様式を「大坂建」といいます。「大坂建」の方が新しく建てられたとされています。

和釘

和釘は、日本の伝統的な家屋建築で使われる釘のことです。通常の釘とは違い、細長い形状で木材に優しく、丈夫に取り付けることができます。和室や床の間棟など、伝統的な建築に欠かせない素材で、美しい日本建築の一部を支えています。

和釘

和釘は、日本の伝統的な家屋建築で使われる釘のことです。通常の釘とは違い、細長い形状で木材に優しく、丈夫に取り付けることができます。和室や床の間棟など、伝統的な建築に欠かせない素材で、美しい日本建築の一部を支えています。